

徳富蘇峰は自分の人生をどう語ったか（一）

伊 藤 彌 彦

一 蘇峰解釈の手がかりをもとめて

ここでは各論にはいる前に徳富蘇峰の思想構造を分析する手掛りを求めて、彼の生涯に現われる特徴的な様態や気なる言説を列挙しておくこととする。

・多彩で捕らえにくい生涯

九十四年の波乱の人生、雄々しい人生を送った蘇峰には三つの顔がある。第一に新聞記者として言論活動に情熱を燃やし、あらゆる問題に対して、その時その時の自分の見解を提示した顔。第二に政界中枢の黒幕として政局に関与した顔。第三に修史家として執筆活動に従事した顔である。

徳富蘇峰の長い生涯において、変わらなかつたものと変わったものは何か。その変化に関して蘇峰自身はどう語っていたか。あるいはまた人間蘇峰を動かした基本的な動機付けは何か。また敗戦後の日本でどうして生計を維持できたのか謎だらけであるが、蘇峰の周辺には秘書や口述筆記人や看護婦や何人かの人々がいつも、そして死の瞬間まで、取り囲んでいた。このように人を惹き付けるふしぎな人柄の主でもあった。それを含め蘇峰を突き動かした人生観、世界観や蘇峰の「人となり」について知っておく必要がある。

ところで人間蘇峰を個人として分析する場合と、社会的存在として蘇峰の発言や政治活動の客観的査定を試みる場合では異なる姿が浮上してくる、と感じるのもいつわらざる感想である。

・長寿のこと

人物論において寿命の長短は複雑微妙な影を落とす。たとえば新島襄（一八四三―一八九〇）、福沢諭吉（一八三五―一九〇一）、徳富蘇峰（一八六三―一九五七）の三人を並べてみよう。四十六歳で死んだ新島は短命に過ぎ、九十四歳まで生きた蘇峰は長命に過ぎ、六十六歳で死んだ福沢はその中間に位置する。

新島襄は幕末の徳川体制社会、南北戦争後のアメリカ市民社会、明治新日本の三つの世界を経験した。日本の青年たちに新しい価値観を付与する使命感に導かれて大学設立運動に従事したが、道半ばで客死した。教育事業家としてキリスト教伝道家として早死した彼には人生態度のブレが少ない。要するにカッコイイのである。

福沢諭吉も幕末と明治の二つの世界を体験した。「あたかも一身にして二生を経る」と自ら語るが、さらにその後半生においても明治十四年の政変以前と以降では社会的影響力も異なるし、時代状況の展開とともに発言も複雑化した。もつと長生きして昭和期を迎えたらどうなっただろうかと思像する。福沢を誹謗するつもりで想像するのではない。丸

山眞男が分析したように、福沢諭吉は「自分の信条の自発的な流露」にしたがつて言説を展開したタイプではなく、「自分の氣質、生活とか、好みとか、好悪を逆に抑制して」時々の状況に対して「自分の選択にもとづく自主的な判断」を下して言説を布教した人物であったからである（『丸山眞男集 別集 第三卷』、一二〇―一二三頁）。福沢論のむずかしさ、福沢の言説が誤解され続ける宿命をもったことは、この「状況的発言」に原因するといわれる。

文久三年生れの蘇峰・徳富猪一郎をどう描くべきか。徳富蘇峰は明治時代になって自己形成をした人間である。もし仮に日清戦争以前に死んでいたら、蘇峰は「明治の青年」の代表格として思想界に輝かしい存在感を示し続けたであろう。しかし彼はその後も長く生きつづけ、「明治後期・大正の中年」を経て「昭和の老人」になり、亡くなったのは敗戦後十二年目であった。

長寿の人物の評価はむずかしい。いくつかの評伝はあるが、トータルに蘇峰の生涯を描くのに成功しているとは言えない。徳富家の法律顧問を勤めた早川喜代次の『徳富蘇峰』は蘇峰近辺の人々からの資料提供をうけて書かれたいちばん詳しい伝記であるが、それとて石河幹明『福澤諭吉伝』や富田正文『考証福澤諭吉』の緻密さとは比べものにならない。安藤英男『蘇峰 徳富猪一郎』は野心的な評伝ではあるが史実等の記述に間違いが散見される。これまでの蘇峰研究でもっとも優れた分析は、植手通有が筑摩書房の明治文学全集34『徳富蘇峰集』に附した「解題」である。見解は私と異なる点も多いが、今度刊行された遺稿集三部作の第二巻『植手通有集 二 徳富蘇峰論』に、大正期、昭和期を追加して、大幅な書き直し稿として収録された。ただ失明後の口述による補整という悪条件下の仕事で最後は（未完）となっており、植手通有さんの無念さが思われる。

・人生の目的

徳富蘇峰は、日本の敗戦で人生最大の挫折を体験した。そのころの人生を総括した日記に『終戦後日記』全四巻がある。当時八四歳の蘇峰は、自分の生き方についてこう語る、「予は八十四年、次から次へ忙がわしく、遽ただしき生涯を送つて来た。別に功名富貴を志す訳ではない。但だ苟くもこの世に生れたからには、何か御用に立ちたいというだけの志に外ならなかった。漢学流に云えば、男児豈空しく死せんやである」(一九四六年八月十四日、『終戦後日記』Ⅲ 一三頁)と。蘇峰の言説がしばしば「転向」と批判されたように、その発言には多くの変動があった、しかし晩年の蘇峰のこのような「何か御用に立ちたいというだけの志」への言及は、彼の人生態度にはある一貫性が存在していたことを思わしめる。

生き方をめぐって蘇峰の心の深所には、一つの人生観を刻み込まれていた。「人間の生活は畢竟、高尚なる奉仕の為にするものであり、人間の価値は奉仕する心の純潔と熱情とに依つて、定まるものであると云ふ事を教えたのは、新島先生である」(『蘇峰自伝』一〇九頁)と語る。人生はある使命ために生きるもの、という信念、若き日に新島襄から刻印されたこの信念が、新島襄に対する敬意とともに生涯維持されていたことは確かである。

・人間の職分

若き蘇峰は人生を語る時しばしば「職分」という言葉を用いた。『新日本之青年』のなかで「人生ハ二個ノ資質ヲ有ス。曰ク形体的曰ク精神的是ノミ」と言い「蓋シ形体的ノ目的ハ生活的ニアリ。：然ラハ則チ精神的ノ目的ナル者ハ果シテ如何。：人ハ家内的ノ境遇ニ入ラサル可ラス。人ハ国家的ノ境遇ニ入ラサル可ラス。人ハ他人ニ向テ其職分ヲ有スルモノナリ。人ハ自個ニ向テ其ノ職分ヲ有スルモノナリ。：知識明ニシテ職分ノ手段ヲ誤ラス。心術正フシテ職分ノ道ヲ外

レス：我カ権理ヲ拡張シ。我ハ義務ヲ遵奉シ。…之ヲ要スル二人ハ人タルノ職分ヲ尽シ。其幸福ヲ享有スルノ大目的ヲ有スル者ナリ」（原著九三―九五頁、『徳富蘇峰集』一四三頁）と説明した。

ここに言う「形体的」の中身は身体的のことで、私的幸福を含む個人の欲望の充足を肯定するものである。が、その上に「精神的」資質があった。それは家族、社会、国家と関連する公的な「人タルノ職分」のことであった。つまりは私的生活の充実と公的活動への参加の両方が満たされた人間像が想定されていたことを押さえておこう。

それ以前に著した『自由、道徳、及儒教主義』のなかに、「職分」の観念についてのかなり詳しい考察が書き込まれている。「当ニ行ク可キ路ハ是人間ノ職分ナリ。職分ヲ行フノ外豈又徹底ノ目的アラシヤ。故ニ曰ク道徳トハ人間当然ノ職分ヲ踐行スルノ謂ナル事ナリ」と（『徳富蘇峰集』三五頁）。平たく言えば人生は使命を果たすために存在する、ということである。蘇峰に言わせれば、職分は道義的性格をもつが、それはあくまでも自己意思によって自覚あるいは発見されるべきものであった。言い換えれば他律的に規定された職分であつてはならないという。

蘇峰にしてみれば、良心、自由に基づかなければ道徳は成立しない。またその「自由ハ職分ヲ達スルノ自由ナリ、道義ニ進ムノ自由ナリ、道徳ノ範囲内ニ活動スルノ自由ナリ」と定義する（同上、四四頁）。人間をこのように自由意志の主体とみていたこと、そして若き日から道徳論的発想を持っていた点を蘇峰の人間観として記憶しておきたい。なおこの『自由、道徳、及儒教主義』のなかで論拠として言及されるホプキンスとは、マーク・ホプキンスの『脩身学』（『新島襄全集』1）のことで、京都府庁から聖書の教育を禁止された時、代わりに新島襄が教科書に使用していたものである。

さらに言えばこの『自由、道徳、及儒教主義』は明治政府が当時始めた保守的道徳教育を批判するための著作であった。蘇峰に言わせれば一八八〇年代になって明治政府が始めた儒教主義教育は、「錨ヲ下シテ之ニ掉スモ船焉ソ進マン、

馬ヲ繫^つテ之ニ鞭^{むち}ヲ焉^{こゝ}ソ奔^はラン」(『徳富蘇峰集』三五頁)がごとくで、青年を進むも走るもできない状態にする教育だと批判した。つまり、生徒を不自由にしておくことを「道德の第一要となし」、卑屈をもって「謙讓」と呼び、諂諛をもって「忠愛」と称する教えて、少年に「奉公人根性」を植え付けるものであると喝破した(『徳富蘇峰集』四五頁)。これでは徳川時代の封建道德と変わらなくなると言うのである。

・ 出発点は封建道德「卑屈」の克服

若き蘇峰には日本人を封建道德から解放するという強い動機づけがあった。封建道德を象徴する精神構造は「卑屈」である。上からの権威による抑圧の下、自分の本心を發揮できない時の心の習慣が卑屈である。「卑屈」の対極觀念としては「自由」や「天真爛漫」を配置した。このテーマが展開された作品が『新日本之青年』である。それは明治政府の学校教育政策が逆コースをたどり、封建道德が復活しはじめた時期に執筆された。したがってここでは、私立学校の必要性が強調されていた。官立学校に較べれば資金も設備も劣る「茅屋破窓ノ私立学校」であるが、「自治ノ精神ヲ發揮シ自動ノ氣象ヲ養ヒ独立剛毅ノ人物ヲ出ス事」においては、精神的感化力の大きさにおいては、優っている(原著一二〇頁、『徳富蘇峰集』では一五〇頁)と胸をはった。『新日本之青年』と同時期に新島襄の依頼で書かれた「同志社大^学設立の旨意」においても「天真爛漫として、自由の内自ら秩序を得、不羈の内自ら裁制あり」という表現がある。付言すれば、蘇峰には同志社精神の機軸を自分が起草した、という思いがあったと思われる。そして、終生同志社に対して母校愛をもったのであった。

・労働の尊重が平民道徳の源泉

蘇峰が大江義塾で行なった講義をまとめて名著『新日本之青年』を出版した際、裏表紙には「ハンマーを握る腕」の絵を掲げていた。また新たに付した序文には、ロングフェローの詩「田舎ノ鉄鍛工」（小学唱歌「森の鍛冶屋」の源）から次の英文四行を掲載していた。

His brow is wet with honest sweat,

He earns whatever he can,

And looks the whole world in the face,

For he owes not any man.

そして「嗟呼あゝ是レ豈ニ自由ノ天民ニアラスヤ。吾人ハ彼ノ泰西ノ平民社会ヲ以テ悉ク皆ナ此ノ典型ノ如シトハセサルナリ。然レトモ：此ノ境遇ニ入ルノ有様ナル事ハ。吾人ノ好シテ断言スル所ナリ。：我カ明治ノ青年ヨ：以テ追蹤スルノ策ヲ講セサルヤ」と書いた。

この様に肉体労働の尊重、自己労働による自立、その自立人の集まりとしての平民社会という世界像が描かれていた。それは、豪農の出自の徳富蘇峰には日常の風景でもあった。

しかしそれが価値観にまで高められたのは、幼くして寄宿した兼坂塾の体験が作用していた。止水・兼坂諄次郎は五百石取りの上士身分を捨てて帰農し、自ら日常労働に服した。そして新文明を採用した生活をおくりながら塾を運営していた。ここに寄宿した幼い蘇峰は、「予をして、人間は階級とか、門閥とか云ふものに頼らず、赤裸々の自力に頼らねばならぬと云ふことを知らせたのは、兼坂先生であり、如何なる仕事も恥ずかしい事は無く、恥ずかしい事は仕事をせずして、ぶらぶら遊んでゐると云うことであると知らせたのも、兼坂先生である」（同、一〇八一—一〇九頁）「少なくとも

とも予は、先生によつて、自治といふこと、平民主義といふ事を教えられたやうに思つて、今尚ほ感謝してゐる」と記す（『蘇峰自伝』五一頁）。

この労働の尊重は、取りも直さず生産労働に従事しない士族階級批判の意味をもつた。蘇峰は彼らの姿勢を「士族根性」と呼び、強い不信感をあらわにした。福沢諭吉の士族観、町人観と大きな分岐点をなす点である。

・平民主義——その観念、その実態

蘇峰の言説には道徳的観点からの発言が多いことの背景として、徳富家が総庄屋として管轄地域の生活社会を世話していた基礎体験が影響しているのではないか。そこでの平民は徳の秩序のもとに生活し、汗水流して生産活動に従事する存在だった。平民主義を唱える蘇峰には平民の徳性に対する信頼があつた。

なお「平民主義」は蘇峰が発明した言葉であり、生涯維持された観念である。後に皇室中心主義（この言葉も蘇峰の新造語）を唱えた時も平民主義と両立させていた。一例を示す、「蘇峰会は、皇室中心主義を真つ向に翳^{かざ}して行^ゆいたが、その皇室中心主義は、世間の皇室尊崇論者とは、大に趣を異にし、即ち平民主義によつて輪郭をとられたる皇室中心主義であつた。一口に言えば、一君万民、天皇と国民との間には、直接の接触を保ち、中間に何等の障壁を設けない所の、皇室中心主義であつた」と（『終戦後日記 IV』二五八頁）。

悲劇だったのは戦前日本社会では中等階級が存在基盤を確立できず、堅実な平民道徳が育成されなかつたことである。とくに桂内閣が締結したポーツマス講和条約に反対した日比谷事件では、都市に集まつた人民が非合理的集団に化す事例に遭遇し、自分自身も国民新聞社焼き討ち事件を経験した。それでも平民主義の旗は下ろさなかつたのであるが、『時務一家言』に次のような感想があることを紹介しておく。

「若し今日以降に於て、國家の憂うれとなす可きものあらば、それは藩閥にあらざ、武權にあらざ、官權にあらざ、而して又金力にあらざ、恐らくは所謂る街頭の物論たらずんばならず。いざと云へば、市民大会は、開催せられ、いざと云へば、焼打事件は、出いで来る。智者も其智に窮し、明者も其明を失ふ。…民主義にして、其の自制力と伴はざるに於ては如何なる時節にも、如何なる場合にも、概して其の到着点は、此かの如くならざるを得ざる也。…其の予防方法は、只だ二つあるのみ。其一は、平民主義其物の実行を抑制する也。其二は、一般人民を教養して自制せしむる也」『時務一家言』（五四「街頭の物論」）。

・政治好き

ところで蘇峰は人一倍政治好きであることを告白している。いわく「予は本来政治が好きであり、政治が予の生命であつた。されど当初から役人にならんとする様な考は一切持たなかつた。平たく云へば当初から大臣希望者でもなく、又た議員希望者でもなかつた。予は唯だ世の中の政治を吾が思ふ様に動かし導かん事を欲したる迄にて、それ以外には何等の巧妙心も無ければ、名誉心も持たなかつた。併し極めて微力ではあるが、世の中を予の是ぜなりと思おう方に導かんとする志は、若もしこれを野心と云ふならば、その野心は燃ゆるが如くであつた」と（『蘇峰自伝』一二四—一二五頁）。

この蘇峰の政治好きという個人的嗜好は、出自にも由来していた。「愛山兄足下、余や鎮西の一隅たる郷土の家に生れたりと雖も、余か家は教世廉吏を出たし、其澤一国に及はざるも、亦た一郷の民に及ひたるもの也。治国平天下の志は、父母の膝下に於て、夙に鼓吹されたりき。身不肖なりと雖も、所謂る当世の大人に從て、其の教を聞くの機会を失はざりき」（『山路愛山に与ふ』『世間と人間』一二五七頁）と。生れた時から、総庄屋という地方政治、地方行政を取り仕切る環境下に育つたのである。水俣の実家には若き日の陸奥宗光や松方正義も来訪していた。

またこうも言う「要するに予の一生は日本国と終始終始せり。日本国は予の偶像なり、予の愛人なり、凡有る予に於ての一切なり。別言すれば日本国を離れては此の覆載〔天地〕間に一個の徳富蘇峰なきなり」（『終戦後日記 Ⅲ』二二二頁）と。蘇峰はよく政治に恋愛したとか、日本国を恋人にした、と自他ともに言われている。

・武器としてのジャーナリズム

その政治好きの蘇峰が選んだ政治手法は、自分自身が政治家や官僚になるのではなくして、彼等を動かし、世論を教導し、自分の思う方向に国を動かすという野心に志に支えられていたというのである。この目標を達成するための最大の武器は、自分が創設し、意のままに経営した民友社と国民新聞社から刊行する新聞、雑誌、書籍類であった。

自伝によれば新聞記者になるという「立志」を十五歳にして固めていた（孔子において十五歳はまた志学の年齢）。そして地主名望家でありながら、早々と土地を手放して東京に出て、今日いうところのベンチャー事業家となり、民友社、国民新聞社の立ち上げに成功したのであった。徳富家は、豪農層としては例外的で、大胆な職業転換を実行した家である。

一八八七年二月に創刊した『国民之友』は順調に成長し、はじめ月刊誌で出発したものが、八ヶ月後には月二回、その三ヶ月後には月三回の発行になり、ついに週刊誌になった。さらに一九〇年二月一日からは、念願の『国民新聞』が創刊された。

この『国民新聞』を創刊するにあたり、つぎの二点を蘇峰は他紙との差異化の工夫として挙げている。一つは文人徳富蘇峰の面目躍如、紙面を多面的な内容で飾ったことである。「予は新聞の問題は決して政治、経済に限るものではない。文学、宗教、美術、凡有る社会問題、凡有る人事問題、悉く新聞紙面の種として取扱ふべきものであるから、政治経済

に偏重する必要の無き事を認めてゐた」（『蘇峰自伝』二五九頁）と。これは先行した『国民之友』の手法の延長であつた。『国民之友』は「政治社会経済及文学の評論」を標榜し、今日いうところの総合雑誌の性格を持たせたことが成功の秘密のひとつであつたが、『国民新聞』の記事もまた領域を生活、思想など幅広く人間の関心事に拡げていた。さらに紙面のビジュアル化を企画した点でも先駆的であつた。社内いちばんの高給取りとして招聘したのは京都画壇の大御所、久保田米憊であつた。まだ写真未発達の時代、紙面を米憊の木版画スケッチで飾るといふ斬新な工夫のためであつた。

もう一つは、政治家徳富蘇峰らしくオピニオン紙として世論を教導することを鮮明な目的をしたことである。「予の主なる目的は、此の新聞を以つて改良の目的を達せんが為であつた。当時予の最も熱心であつたのは、第一、政治の改良。第二、社会の改良。第三、文芸の改良。第四、宗教の改良であつた。…その中にも、政治の改良が予の最も熱中する所であつた」（『蘇峰自伝』二六五―二六六頁）。ここに最大の関心事として「政治の改良」が挙げられていた。なお『国民新聞』において想定された読者層は、陸羯南の『東京電報』と重なる層だつたという。「書生流の新聞で、孰れもその読者は実業家とか、金持ちとかで無く、寧ろ論客、志士、其他世の中を俯仰しない、特色ある人々を讀者とする」（同、二八六頁）と。

社会の改良と政治の改良とは連動した事柄であつたが、政治の改良の具体策としては、まず藩閥勢力批判、士族層中心の政治の打破を唱えた。ついで破壊の時代から建設の時代の政治へ、とくに国会における立憲政治の確立などを課題にしていたと云える。なお蘇峰が発案した「平民主義」という言葉は、このころの社会の改良にも政治の改良にも共通する概念であつた。

・蘇峰の日常

蘇峰の日常生活について述べる。蘇峰の日常では、頑固なまでの秩序的な生活習慣が、生涯、保持されていたことを紹介しておきたい。

国民新聞社社員だった後藤是山は、蘇峰の日常生活について次のように回想する、「先生ぐらい時間を正確に処理して行く人はおらぬと思う。全く型から打ち出したように、正確に毎朝五時になると机の前に座っておられる。七時半ぐらいになると下に降りて行かれる。食事が済んだら三、四十分ぐらいは話して、すぐ書斎に行かれる。昼頃になると新聞社に出て行かれる。三、四時間外国から来ておる新聞雑誌を読み、新聞に目を通して新聞に載せる原稿を書かれる。五時ぐらいになるとまた家に帰られる。そして夕御飯。それから三、四十分話しておられる。そしてまた書斎。おそくとも晩十時には床についておられる。また翌朝五時に起きられる……。それは型から打ち出しとよみに変らない。

国民新聞時代は先生の有名な時代ですね。それで政治家、実業家、軍人の連中などが、よく晩餐の案内がありました。それを先生は一々断つて居られた。：」（『追想の徳富蘇峰』五九頁）と。

一時秘書であつた並木仙太郎は書く、「先生は曾て語られた。自分位の年齢になれば、精力を蓄積するといふことは^{むづか}六ヶしい。寧ろ精力を消耗しないことに注意すべきだ。血一滴でも、無駄に出したくないと」（並木仙太郎『蘇峰先生の日常』蘇峰会（非売品）昭和五年九頁）。

「先生の嫌ひは、講演と宴会と揮毫の三だ。先生の講演は所謂お座成りではない。引受けた以上は、真剣にかつ徹底的にやられる。内容の調査準備等に、相当の日時が入る。イザ講演となると、厳冬でも流汗玉の如しだ。：」（同書、一二頁）

「先生は酒は一滴も口にせぬ、烟草は其煙を見るのさへ厭のようだ。酒客と伍して飲食するのは、嗜好に合はぬのみな

らず、無駄の時間を費し、且つ不衛生であるから大嫌ひだ。揮毫に至つては、前二者に劣らぬ苦痛だ。……」(同書、一三頁)

並木仙太郎の記述から大森時代、国民新聞社退却後の一日をまとめて見ると以下の様である。

五時起床(夫人は四時)、連載一回分の『近世日本国民史』執筆、各種の朝刊紙を通読、ヒゲ剃り、洗面、朝食。十時頃まで新聞散見または夕刊用の論評あるいは国民史の二回分執筆。新着の洋書、新刊の和書読み、書庫で整理や渉猟、来簡を一通り読むが、返信はほとんど秘書(三月十一月は朝食後夫人と庭の散歩や植物の世話を小一時間、九時まで)。

正午に人力車で大森駅、省線(鉄道省の電車)で新橋駅へ、京橋の民友社。外国新聞雑誌読み、来客面会、文章の口述など。週二、三日は東京日日新聞社に行き校正(国民史や夕刊用の論評を)十七時頃民友社退出、大森駅から必ず徒歩で山王草堂へ。入浴、午後着の書状や夕刊読み、夕食、翌日の国民史の準備、時に詩集等、九時半おそくとも十時迄に就眠(日曜や旅行中は午後一時間位後睡)。

朝食(七時から七時三十分)。卯の花汁か野菜のみそ汁、ゆで卵二個、塩ジャケか塩イワシ、しらす干し、ご飯二杯、コーヒー、菓子、果物

昼食。民友社で、フランスパン二個と番茶。冬は釜揚げかソバ。懇意な人々とはエーワンのランチで会食
夕食。豪華な夫人の手厚い手料理、魚河岸に時々買いにでるほどで夫人には魚の鑑定の妙あり。

一見したところの偉丈夫で俗物的な姿とは裏腹に、蘇峰は酒も煙草も嗜まず、宴会を蛇蠍のごとく嫌い、自分の時間を完璧にコントロールした人生をおくった。あの百巻におよぶ『近世日本国民史』を完成することができた秘密もここにあったといえる。これをピューリタンのとみるべきか、あるいは伝統的な「修身齊家」の実践編とみるべきか。いず

れにせよ「治国平天下」を志ざした蘇峰の日常である。彼の政治意見には精神主義的観点が多いこと、また道德主義的人間観が蘇峰の分析軸あることは彼の生活態度を反映していたのではないか。また道德論的観点と教育家言説とは無関係ではなかったと考えられる。

・社会事業、教育事業

蘇峰は気前よく私財を公共のために供する人生を歩んだ。その対象は北海道家庭学校、故郷水俣など多数にのぼったが、なかでもひんぱんな寄贈先は母校同志社に対するもので、中身は金銭、土地家屋、蔵書などにおよんだ。ここでは二つの代表的な寄附事業を紹介する。

(1) 「青山会館」の建設。一九二二年、青山会館建設のため青山の自宅を提供し、大森山王に移った。「更らに自から省みますれば、大正十一年は六十歳となり、十二年には、世俗の所謂る還暦になります。私も自分相応に、何なりと社会奉仕をなす可きであろうと考へました。∴彼を思ひ此を思ひ、寧ろ青山の現住宅の敷地を、社会教育公館設地の敷地に寄付しては如何と思ひ付きましたのは、去年の末頃でありました」(「青山会館の建設に就いて」大正十年十二月二日夜、日本倶楽部の演説草稿)。

「青山会館は、日本国中、否な海外に互りたる日本青年の交通、紹介の倶楽部です。固より決して東京市民のみの、専有ではありませんぬ。一般の民衆が共に学び、偕に楽しむ平民倶楽部です。固よりブルジョア階級の物ではありませんぬ。入学試験も無く、束脩も無く、月謝も無く、僅かに入場料を払う^か乎、払わぬ乎の、平民の大学です。男子と云はず、婦人と云はず、老人と云はず、幼者と云はず、清新にして、健全なる娯楽の享受場です。手軽に日新の知識を獵る簡易図書館もあれば、財囊の重からざる地方青年の、暫時の上京に寄宿する便宜もあります。数千人の大集会も出来れば、数

百人の小集会も出来ませ。…」（青山会館設立主意書） 大正十年十月八日。

(2) 「国民教育奨励会」の設立。一九一九年、『国民新聞』一万号記念事業として財団法人国民教育奨励会を設立。国民新聞社および公募による寄付金三十万円を基金に小学校教員を対象とした教育奨励事業を行なった。

・伝道事業家

自己を語る蘇峰の言葉のなかにこんな表現もある、「所謂伝道の精神は、何人にも劣らなかつた。而してその所謂伝道とは、キリスト教の伝道ではなくして、治国安民の伝道である。即ち日本国を世界第一等国たらしむる為めの伝道である。この伝道には、第一の武器は、文章である。第二の武器は演説である」（『終戦後日記 Ⅲ』四二頁）と。

「治国安民」の伝道、「日本国を世界第一等国に」する伝道、つまり蘇峰は「日本ナショナリズム」の伝道事業家であった、ということである。蘇峰の伝道人生は、第一義的には、言葉を通じて人に働きかけ、人間を動かすことを使命とした人生であった。

しかし、自分の言論活動で日本を動かすことができると本心に考えていたのだろうか。この「野心」が蘇峰の言説の強烈な影響力（善くも悪しくも）を流し続けたと思われる。

・誰を対象に伝道していたか

「伝道」という言葉が示すように、意外に思われるかもしれないが蘇峰の姿勢には、生涯、他者に働きかける教育者的な軸があった。誰を対象としていたのか。

(1) 無名の青年。最初の教育事業は、白面書生（無名の青年）たちを相手にする大江義塾に始まった。そのねらい無

名の青年たちに新時代を担う主役を自覚させる「人づくり」にあった。「政治ヲ改革セント欲セバ、先ヅ人間ヲ改革セザル可ラズ」(『資料集』六六八頁)という。「天保の老人」に代わり「明治の青年」を育成して社会改良、政治改良の主役にしようとした。

(2) 中等知識階級。東京に出てからの働きかけの対象は「国民之友」読者層であった。つまり有識者、学生層を相手にしたもので、いわば全国版の社会教育を行おうとした。そこで期待したのは「士族階級」に代わるべきものとして「中等階級」を育て、公的職分の担当能力を開発し、社会参加させることであった。

(3) 政権担当者。次には政権中枢に接近して、有力政治家を教育しようとした。特に濃かったのは桂太郎との関係であった。これらは国政レベルの政策形成および政策実施過程に対する影響力行使が狙いであった。

(4) 国民大衆。「皇室中心主義」を言い始めてからの伝道は、国民大衆つまり被治者層全体を対象とした。挙国一致を唱えて国民を一体化する目的の活動、全体主義を担う活動であった。とくに一九二九年以降、『国民新聞』よりもはるかに大規模な全国紙『毎日新聞』のコラム欄に書くようになり、さらには大日本文学報国会会長や大日本言論報国会会長に推され、政府のお墨付きのもとに用紙割り当てを受けてパンフレット風の冊子を大量に書き散らし、ラジオにも出演し、さらには全国各地に組織された「蘇峰会」を通じて講演旅行を繰返した。

(5) 天皇。また、「皇室中心主義」を唱道し始めた蘇峰は、天皇親裁の実現のために、今上天皇を有能な政治主体に高める必要を痛感した。このとき天皇を教育すること、つまり「進言」を計画していた。「予は皇室中心主義を実行するには、君徳の御涵養という事が、最も大切でありと認め、従て屢々この事を機会ある毎に開陳した」(『終戦後日記』八六頁)。この時のモデルは、日清、日露戦争を指導し成功を収めた明治天皇であり、昭和天皇をそのレベルに高めたいと働きかけたと思われる。またこの辺に蘇峰の政治機構にたいする政治不信の一面が現れている。

・皇室中心主義

「皇室」を持ち出した背景を考えてみる。蘇峰が期待していた平民主義の担い手がエゴ追求主義の群衆に化したことへの失望があった。別な見方をすれば、蘇峰は平民主義が私的欲望主義に墮ちる危険性を知って、それを防止するためのモラル、いわゆる「精神的貴族主義」、には「皇室」しかないと考えたのではないか。

いわく「問題は如何にして此の国家を全美、正義、且つ剛健にして有力なる国家となすかにある。それには上かみに御一人、下しもに万民、即ち皇室中心主義の平民政治を行ふの他に妙策はない。即ち政権を支配者階級から取り来りて、之を全國民に分配するにあるのみだ。併しそれには國民の品性を陶冶し、何れも一人前の人間として、高顔世上に闊歩する者と為さねばならぬ。國民教育の大切な所以は、實に此に存する、吾人が全国の小学先生の方々に捲々たるも、實に此れが為めだ」と（『國民教育論』二二六頁）。かつて伊藤博文は明治憲法に盤石の基礎を与えるための資源として「皇室」を発見した、「我國ニ存テハ宗教ナル者其力微弱ニシテ：我國ニ存テ機軸トナスヘキハ独リ皇室アルノミ」と。蘇峰の皇室中心主義はこの昭和版といえる。

・伝道活動の成果をどう語っていたか

長くなるが先述の敗戦時の回顧（四頁）のつづきを紹介しよう、毀譽褒貶の激しかった自分の言論活動に関する述懐も含まれている。「当初は横井小楠の学説を基礎としたる、家学に則り、それと殆ど揆を一にするマンチェスター派の、自由平和の主義に陶醉し、かくて世間で所謂いわゆる、予の出世作たる『将来之日本』は出できた来た。ところが實際問題に接近するに従い、目標は一直線であるが、それに達する道程は、凸凹、上下、電光形や、ジグザグの径路を、執らねばならぬ事が、経験によって教育せられた。それらの経験も、決して廉価な経験ではなかった。しかし古人の言う通り、心は

万境しなに随したがつて転じ、転ずる所実によく幽いよなりで、愈々いよよ行き詰りと見れば、一関いせ排はし来きつて、また別の世界があり、更に行き詰りと思えば、また別の世界があつて、遂に八十有四年の、長き丁場を渡り来つた。その間には、自分は自ら自分を葬くわむつた事はなかつたが、世間からは幾度か葬られんとした。しかし自分には、常に前途の光明があつたから、万難を排して、その光明に向つて、突進したのである。その中には、自分ながら若気の至りであると、思つた事もあり、智慧分別が足らなかつたと、思うこともあるが、大体に於て、何等悔恨する所はない。自分は常に、人生は百事意の如くならずというが、また必ずしも、百事意の如くならざるでもないという事を言つた。即ち三を失つて、七を得たる事もあれば、五を失つて五を得たる事もあり。即ち失敗というも、要するに七を失うて、三を得る程度のものである。即ち不如意でもあるが、不如意でもないとは、この事である。予は親しくそれを実験して来た」〔終戦後日記 Ⅲ 一四頁〕

「予は屢々しばしば幻滅を感じた。しかし一の幻滅を感じれば、必ずそれに代わるべき、他の光明を見出した。例えば航海の船が、灯台を目標に航海しつつかある際に、その灯台の光が、突然消失した様なものである。：」〔終戦後日記 Ⅲ 一五頁〕

主旨を要約すれば、蘇峰が働きかけ、方向付けようとした日本の歴史の多くは、思惑違ひの方向に推移した。しかし、何割かの成果を伴うこともあつた。たとえ結果が不如意な時も、その都度、未来志向の態度で対応して、論陣をはつてきた。だから、差引き後悔はしていない、ということになる。自己の言論活動の変遷についての一つの説明であり弁明でもある。

・ 言論活動をどう自己評価したか

こつとも回想する、「薩長藩閥の打破、立憲政体の樹立、帝国議会の開設、二十七、八年戦役、三十七、八年戦役、軍備拡充、皇室中心主義の唱道、東亜の解放、世界的人種の水平運動等、詮じ来れば予の眇ひょうこ乎こたる一公生涯は、日本興

隆史の幾頁の中に特筆大書せられざるまでも自ら其中に潜在することは予が中心欣慰きんいに禁たえざる所なり」(『終戦後日記 Ⅲ』二二二頁)。敗戦の玉音放送時までは、主要事件で世論を指導したという誇りを持つていたのがわかる。

しかしまた晩年にはこのような述懐を残した。「私は歴史を作る人間になりたいと思つてゐたのに、歴史を書く人に終つてしまった。私は人生の失敗者だ」と彼は言つた。最後の帰郷で、熊本市民への挨拶の言葉であつた。椅子に深々と腰をおろし、つぶやくやうな低音で語るその言葉を、同じ壇上にあつてすぐうしろから、私は聞いていた。その言葉には一抹の悲しみがこもつて居た。平生、私は新聞記者です、とむしろ誇らしげに語つてゐた彼を知つてゐるだけに、私はいたく心打たれたことを憶えてゐる」(森本忠「明治と共に生きた人」『追想の徳富蘇峰』三八頁)。

・言論活動時の姿勢

敗戦時に「予は何故に失敗したるか」を問うて「予の独自一己性」をその原因として挙げた。「徹頭徹尾一本立ちの漢おとこで、何人なひとの子分にもならず、何人の親分ともならず、自主独立、独立独行した事が、つまり予をして、根限り力限り働はたららいて、得る所は何も無かつたという、結果に畢おわつた訳であろう。」「しかし世間では、かく思つてゐる者は、全く無と言わぬが、恐らく最も鮮すくなく、多数はむしろ反対で、徳富蘇峰なる者は、随波逐浪、世と浮沈する軽薄才子である。政娼せいしょうなどという文句を、浴びせ掛けた」、「ところが己れを知るは、己れに若しくはなしで、自分は十歳以前、漢学塾いっせいの一生である頃から、八十余歳の今日に至る迄、己れを枉まげて他に従ひたうという事が、とても出来ぬ性分である」と(『終戦後日記 Ⅳ』一二五頁)。

別の箇所ではこうも語つてゐる。「余は敢て自ら誇るでもなければ、自らを弁護するでもない。多くの言論著作の中にて、これだけは取り消して置きたいと思つようなのは、殆ど見出ださない。少くとも予は、その当時に於て、予が

最善と思うたる事を語りて、僭越乍ら我が国民を、その方向に導かん事を期した者である」（『終戦後日記 Ⅲ』四六頁）。「：最後に一言す（大正五年三月以来国民新聞に長期連載中の）『大正の青年と帝国の前途』は、実に著者が明治十九年に著はしたる『将来之日本』、及び明治十八年に著はし、同二十年に出したる『新日本之青年』を、当今の時代に於て、現在に著者の見地より、改作したるものにして、云はば著者满腔の心血を洒ぎたるものなり」『時務一家言』一九一六（大正五）年八月二十五日の序文。

『「将来之日本」は、二十四歳の著也。其の瑕疵百出は、固より当然のみ。予が『将来之日本』の原稿を懐き、熊本大江村の閑居を出て、土佐に赴き、東京に抵り、炎風烈日、黄塵滾々の裡、汗を揮うて、其の出版の方便を求めたる當時を、今日より回顧すれば、隔生の感なしとせず。然も当時の予に於ては、唯だ最善を竭したるのみ、昨日は昨日の儘にて、最善を行ひ、今日は今日の儘にて、最善を行ふ。予復た何をか恨み、何をか悔いむ」（一九一六年『大正の青年と帝国の前途』一〇一—一頁）。

あるいはまた『時務一家言』増刷に合わせて付した三つ目の序文（大正五年八月二十五日）に言つ、「著者の立言者としての位置は、其の本書起稿の当初に於けるが如く、依然として不羈也、自由也、無拘束也、無遠慮也。天若し健康を吝しむなくんば、著者は必ず今後に於て、聊か聖代に貢献する所あらんことを期す」と。

総ての自分の言説は自由な自分の意思に基づいて、最善と信じる判断で行つたものであるから、自分の良心に照らして恥じることはない、と過去の言動を隠蔽しないのである。これは、個人の精神衛生、内面的健康の維持方法としては見事な生き方である。かつての日本人は徳川社会を生き延びるために、上位の権力に自己を適合させる処世術を發達させた。蘇峰がそれを「卑屈の文化」としてみなして打破する必要性を論じ、「天真爛漫な自由」に生きる人間像を提示していたことは別稿で論じたが（『維新革命と社会改造の夢』『維新革命社会と徳富蘇峰』所収）、少なくとも蘇峰自身

の人生は卑屈文化ともっとも縁遠い自由人として発言をつづけた人物だったから言える言葉である。

・周辺は蘇峰をどう見ていたか

周辺で蘇峰の実生活を見ていた阿部賢一（蘇峰の三女・久子の夫）はいう「翁の生涯は一面幸福な生涯であったと思います。『自伝』でいつている通り、善き両親、善き姉弟をもっていたことがその一つです。一管の筆をもって己が道を一生自由勝手に振舞うことができたのはその二でしょう。毀誉褒貶には、他の方々はどう御覧になるかは知りませんが、私にはそう気にしていないようでした。随分ひどくやつつけられていても、むしろ楽しんでいました。誰々はひどいことを書きおったが、文章はうまいねー、などと、それも皮肉でなしに淡々と語っていました。良心に恥じないからの自信もあつたでしょうし、性格としても徹底的に人を憎むことはできなかつたと思われます」（『翁の思い出』『追想の徳富蘇峰』、一三〇頁）。自分の言説に対する非難に対しても懐深く対応するリベラルさを保持していた。このように個人としては健やかな精神の主として過していたのである。

ただしそれならば、自己欺瞞のない発言ならばすべては許されるのか、という問いに辿り着く。蘇峰の社会的発言に導かれて行動を起こし、歴史の犠牲者となつた者に対する責任問題は残っているのではないか。ジャーナリストとして過去の発言にたいする責任の問題がここにはある。ここには「良心に従う」という心情倫理としての誠実性によって、政治倫理としての誠実性を無媒介的に合理化する論理が潜んでいるからである。なお植手通有は、明治の言論人において発言がめまぐるしく変化するのは一般的現象であつたが、その際、陸羯南だけは「日本の政治状況において自己の位置が変化したことを、はっきり自覚して、…かつての発言について、弁明ないし自己批判をおこなつた」例外的人物であつたことを指摘している（『植手通有集Ⅰ』三三七頁）。

蘇峰が亡くなった時、朝日新聞に長谷川如是閑の短い追悼文が掲載された。蘇峰と共に同時代を生きたジャーナリストである。いわく「それにしても明治以来の日本の歴史の変化に蘇峰その人くらい、すなおに順応して長い一生をおえた人は珍しい。：蘇峰の近代国民主義は、日本の国家それ自体の歴史と同じく、その近代的理性を失って、過去の典型の国民主義、むしろ、国家主義に転じて、蘇峰その人が後の史家から超国家主義者などと呼ばれるようになった。私のように日本派の一人として身を立てながら『国民之友』を愛読し、それが国民新聞になっても続いて愛読していた者は、蘇峰のその変化を惜しむほかなかった。：しかし、パージになって純然たる歴史に閉じこもってなお健筆をふるっていたその長い生命の健かで、少しも老衰の気配を見せないには嘆賞のほかなかった。：九十四歳の長い生命を有効に生き通した人ともいうほかはない」(『蘇峰翁を悼む』『朝日新聞』一九五七年十一月三日)と。

ここにも一個人の人生としてはうらやましいほど健やかで有効に生きた蘇峰と、時代に翻弄された蘇峰の両面が指摘されている。問題は「明治以来の日本の歴史の変化に蘇峰その人くらい、すなおに順応して長い一生をおえた人」という如是閑の指摘の「すなおに順応」をどう解釈すべきにある。福沢諭吉に劣らず徳富蘇峰も時々状況に対して「自分の選択にもとづく自主的な判断」を下して言説を布教した人物であった。本人自身においては断じて状況追隨的発言ではなかったのである。

言論人としての自分の姿勢をどう語ったか。還暦の時の文章がある。「予の一生を一貫したる精神は、甚だ殺風景なる申分であるが、正直の所、反抗的精神だ。時により、処により反抗の対象は異っているが、精神夫れ自身は一貫している。：自分が今日最も頭の中にあることは、白閥退治である。：予は子供の時に熊本の士族閥に対し反抗し、青年にして同志社の宣教師閥に対して反抗し、壮年にして藩閥に反抗し、支那閥、露西亜閥に対して反抗した如く、六十の今日に至って尚此白閥に対して反抗することを禁じ得ない。率直に語れば反抗其の物が予の精神であり又予の生命である。

之が失墜せられる時には、最早^もや予は此の世に生存せぬ者である。生存しても価値なきものである」(「還曆を迎ふる一新聞記者の回想」『中央公論』一九二三(大正十二)年一月号)と。

つまり六十歳の時点で蘇峰本人は、常に「歴史の流れ」に抗して立言をし、歴史を誘導しようとしていた、という意識をもっていたのである。これは長谷川如是閑のいう日本の歴史に「すなおに順応」とはずいぶん空気が違う。この自他の認識の落差をどう見るべきであろうか。士族、藩閥に反抗した時代は「平民主義」の軸で解釈できる。明治政府を批判しその改造(第二維新)を考えたのであった。宣教師閥、支那閥、露西亞閥、白閥に反抗するのは「ナシヨナリズム」の軸を立てると大部分の説明がつく。やがてナシヨナリズム軸は次第、次第に政府と協調し歴史の流れに対して順応的になったのであった。ただし私のみるところ、蘇峰は帝国主義者になり、皇室中心主義を唱え、国家主義を鮮明にした段階でも平民主義の旗はかざしつづけていた。

・ いわゆる転向、変節という批判に応答して

蘇峰の弁明のいくつかを時代順に並べておく。

「世間の多くは、予が立場を変更する毎に、予が意見は変更するものと做^なしたりき。されど其実は予は意見によりて、立場を変じたる事あるも、立場によりて、意見を変じたる事なし」(一九一三年。『時務一家言』(緒言六)。自分の見識の変更が自分の立ち位置の変更によるものでないことを強調。

「世人は予を目して、御用記者と云へり。されど予は桂公の政友たる以外に、何等の義務にも服したる事なし。予は我が良心の許容せざる意見に、未だ曾て賛同したることなし」(一九一三年。『時務一家言』(緒言十五)。桂太郎首相に對しても「我が良心」を枉げた言説はしていないことを強調。

「併し翻つて予の一生を見れば、予の意見、議論などは可成り変化した事がある。而して予は其の変化の為に、所謂変節漢、節操を失つた者とまで非難されたことがある。即ち知識上の欠陥に止らず、徳性上の欠陥として、非難されたことがある。併し予自らに於ては、何等疾しいところを感じない。予の意見を変じたのは、周囲の変化に依つて、変じたものであつて、謂はゞ冬外套を着け、夏に帷子かたびらを着るの類であつて、何等不自然のことも無く、極めて自然と感じている」(一九三五年。『蘇峰自伝』六八七頁)。時々状況の変化に対応した新しい政治判断を提示したことを主張。

「余の議論は、時と場合によつて、相当変化を示しているが、それは对症投薬で、病に対して処方箋を書きたるもので、病が去れば、薬も去るべきは、当然である。予が著作は、自ら葬らざる迄も、時代の必要がなければ、時代が予に代つて、予の著作を処分して呉れるから、その方については、別に何等の心配の有りよう筈がない」(一九四六年。『終戦後日記』Ⅲ「四六頁」)。ここでも変化した状況に対応して自己判断、新見識、新処方箋を述べたものであるから変化があつても当然である、とする。

しかし結果論からすれば、蘇峰は時代に巻き込まれていたし、国民を巻き込む言説を行ったのである。これ以上の評価については個々、具体的事例に即して考えていかなければならない。

二 生涯の時期区分の試み

さきの引用文(一八頁)のなかの「遂に八十有四年の、長き丁場を渡り來つた。その間には、自分は自ら自分を葬むつた事はなかつたが、世間からは幾度か葬られんとした。」という文言に注目しておきたい。世間が何度か蘇峰を葬ろうとしたのは確かである。

まず『國民之友』や『國民新聞』の読者を裏切り松方内閣の勅任参事官となった時、その松方内閣が閣内分裂した後にも政権側に留まった時、桂政権を擁護していたためにポーツマス講和反対の日比谷事件で國民新聞社が焼き討ちされた時、「大正の政変」で二度目の社屋焼き討ちにあった時、がそうであった。それらは蘇峰の生涯を時代区分する指標となろう。逆に世間が蘇峰に同情し、元氣づけた時もあった。不本意にも國民新聞社を手放した時である。これも人生の区切りであった。他には蘇峰の主張が歴史の現実によって大きく裏切られた時も転機となった。三国干渉と八・一五である。

また新聞記者蘇峰の人生に大きく影響したのは戦争であった。戦争が起こると蘇峰には意識の高揚がみられる。まず新聞記者になる決意を固めたのには、同志社時代の西南戦争を報道した新聞記事、とくに福地桜痴の『東京日日新聞』に魅了されたのであった。その時は、記事の中身もさることながら「又た福地氏が戦地より帰るや、彼は一布衣はいの身を以て謁見仰付けられ、親しく戦況を奏上した。此事の如きは予の頭脳に尠せうからざる刺激を与えたやうに覚えてゐる」(『蘇峰自伝』九二頁)と語っていた。かくして「明治十年——予が十五歳の時——の初はじには、已にその志が確立してゐた」(同所)。先述した「人生いかに生くべきか」の課題に対して、十五歳にして立つ。ずいぶん早熟な立志であった。

日清戦争時には、多数の従軍記者を派遣し、現地からの戦況報道で『國民新聞』は部数を伸ばした。この時、蘇峰は絶頂感を味わつたという。国木田独歩は一八九四年九月十二日夜、京橋のレストランで開かれた民友社社友の懇親会の様子を描く、「吾は昨夜、新聞記者たちの意気軒昂を見たり。彼等は脇目にも活世界に躍りつつあるが如く見ゆ。彼等は全世界の歴史が日清戦争に関するものありとして論じ、全力をこめてはたらく可しと誓へり」(『欺かざるの記』)と。そしてその後、衝撃の「三国干渉」に遭遇したのであった。桂内閣下での日露戦争勝利の時は痛快の極みであり、広島に設置された大本営に社長の蘇峰みずから出入りした様子が伝わっている。満州事変から大東亜戦争の時代は、國民新

聞社を手放し全国紙の毎日新聞社實として、また大日本言論報国会会長として、戦況報道記事ではなく戦意高揚記事で日本の戦争の旗振り役をつとめた。そして日本の敗北で、人生最大の屈辱を味わったのであった。

蘇峰の生涯を概観すると、新聞記者、政権の黒幕、修史家の三つの顔が浮上する。そのどれが中心であったかは、時間軸によって異なるが、上に見たような個人的資質、賞賛や非難といった世間からの評価、そして幾度かの戦争という契機を考慮して、重複や空白期を恐れずに言えば、以下のような時期区分があげられるのではないか。

一八六三―一八八〇 自己形成時代

兼坂塾など、熊本洋学校、同志社英学校

一八八一―一八九四 社会改良家時代

大江義塾、『新日本之青年』、『将来之日本』、『国民之友』、『国民新聞』

一八九七―一九一八 政権の黒幕時代

第二次松方内閣、桂内閣、寺内朝鮮総督府顧問、『国民新聞』

一九一三―一九二九 立言者ならびに修史家時代

『国民新聞』、『時務一家言』、『大正の青年と帝国の前途』、『杜甫と彌耳敦』、『近世日本国民史』

一九三〇―一九四五 大衆伝道家ならびに修史家時代

毎日新聞社社實、蘇峰会、『昭和国民読本』、『近世日本国民史』

一九四五―一九五七 塾居隠居ならびに修史家時代

『終戦後日記』、『近世日本国民史』

*文中の略称表記の文献

『蘇峰自伝』↓徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社、昭和十年。

『徳富蘇峰集』↓植手通有編『徳富蘇峰集』明治文学大全集34、筑摩書房、昭和四十九年。

なおこのなかの「解題」は、植手通有『植手通有集2 徳富蘇峰論』あつぷる出版社、二〇二五年六月三〇日、に補整のうえ収録されている。

『資料』↓花立三郎・杉井六郎・和田守編『同志社大学大江義塾 徳富蘇峰資料集』三二書房、一九七八年。

『追想の徳富蘇峰』↓荒木精之編『追想の徳富蘇峰』日本談義社、昭和三十三年。

『終戦後日記』↓徳富蘇峰『徳富蘇峰 終戦後日記』『頑蘇物語』講談社、二〇〇六年。

一卷以降は同様に、『終戦後日記』Ⅱ、『終戦後日記』Ⅲ、『終戦後日記』Ⅳ』と表示。

*『時務一家言』からの引用には、徳富蘇峰『徳富蘇峰集』現代日本文学全集4、改造社、昭和五年を使用。この本には増版時に追加された五種類の序言、解題類が新しい順に収録されているからである。すなわち、「旧書新刊の就て」大正十四年八月、「巻頭独語」大正十年十月、大正五年八月、大正四年一月、および「緒言（著者の述懐）」大正二年十一月。